上井久義先生のご逝去を悼む

黒田一充

二〇一九（令和元）年六月七日、関西大学名誉教授上井久義先生が逝去された。享年八十八歳。春から急に体調を崩されたとのことだが、一年ほど前からご子息と米寿のお祝いに何か企画をしたいと打合せをしており、論文のデータ化や著作リストの作成作業を行っていた矢先のことであった。生前のご意向で葬儀は家族葬で営まれ、四十九日の法要が終わってから公表された。九月八日に菩提寺である梅田の法清寺で法要が催され、教え子を中心に多数の参列者が集まって先生を偲んだ。

上井先生は、一九三二（昭和七）年に大阪府豊能郡桜井村（現在の豊中市）でお生まれになり、一九五〇（昭和二十五）年に大阪学芸大学（現在の大阪教育大学）に入学され、古代史・民俗学、とくに琉球の祭祀研究で知られる鳥越憲三郎先生に師事された。

一九五四年に学部を卒業されて豊中市内の小学校におつとめになったが、地方史の研究会で知り合った魚澄惣五郎先生から開設されたばかりの関西大学大学院に誘われ、翌年日本史学専攻修士課程に入学して横田健一先生の指導を受けることになった。二期生は三人で、後に結婚された輝代夫人も同級生であった。

一九五七年の大学院修了後は、服部緑地の豊中市立民俗館に就職された。飛騨白川郷の合掌造りの民家を移築保存するために前年十月に開設されたばかりであり、就職後は館の運営にも関わっておられた鳥越先生とともに、鹿児島県奄美の高倉や長野県秋山郷などの民家の移築に携わった。一九六〇（昭和三十五）年に財団法人が発足して、民俗館が日本民家集落博物館に移行するとともに、学芸員として採用され、日本最初の野外博物館の活動に尽力された。一九六四年から関西大学に非常勤講師として出講されるとともに、京阪神の大学の枠をこえて若手の研究者が集まって民俗学を勉強する関西民俗学研究会の世話役を長く引き受けておられた。

一九七六（昭和五十一）年、関西大学に助教授として着任され、翌年教授に昇格し、二〇〇二（平成十四）年まで二十六年間在職された。その間に、文学研究科長や関西大学博物館長などの要職をおつとめになった。

教育面でも、学部生のゼミ旅行や大学院生の研修旅行を熱心に催されたほか、関西大学民俗学研究会を指導された。各地の民俗調査

にも出掛け、その調査報告の場として雑誌『伝承文化研究』を発行された。

さらに、横田先生とともに『紀伊半島の文化史的研究―民俗編―』（一九八八年）を編集されて大学院生の研究成果を収録したのに続き、『座―それぞれの民俗学的視点』（一九九一年）、『聖域の伝統文化』（一九九五年）、そして関西大学を定年退職される年の『民俗儀礼の世界』（二〇〇二年）の三冊の論文集を出版社から出していただいた。いずれも先生と民俗研究会の卒業生の研究成果を収録したが、編集代表はメンバーの中から交代に出て、発表者は必ず毎月の研究会でその内容を報告し、互いに批評し合って了承されたものを本に載せるという条件があった。こうして社会人となっても先生に鍛えられた卒業生が、大学や高校の教員、博物館の学芸員や文化財担当者として多数活躍するようになった。

学外の活動としては、『吹田市史』『羽曳野市史』『粉河町史』などの民俗編の執筆のほか、尼崎市・西宮市・茨木市・八尾市・吹田市・大阪市などの文化財審議会委員や博物館の運営委員をおつとめになった。大阪学芸大学で三年後輩だった考古学の水野正好先生と生涯親しく交際されており、水野先生が文化財審議会を組織する際には、民俗担当の委員として上井先生をお誘いになることが多かったようである。一九九四（平成六）年に就任された四日市市立博物館の館長も、水野先生の後を継がれたものである。

最終講義にて（2001 年 12 月）

学会活動も、日本民俗学会の評議員を通算六期つとめて名誉会員に推挙されたほか、日本生活文化史学会副会長、近畿民俗学会理事などを歴任された。これらの教育研究分野の功績で、二〇一〇（平成二十二）年に瑞宝小綬章を授与されている。

先生の研究は、豊富なフィールド調査に基づいた具体的な検証に加え、文献資料も駆使して信仰や祭儀、社会組織を分析された多数の論稿を発表された。

学芸員時代に、古代の司祭者の問題と各地の頭屋儀礼の論稿をまとめた『日本民俗の源流』（輝代夫人と共著、一九六九年）を発表され、続いて奄美諸島の調査と構造主義の理論を用いて親族組織を分析した『民俗社会人類学』（一九七三年）を上梓された。

関西大学に移られてからは、葬送や墓制の研究論文を集めた『葬送墓制研究集成』の「墓の歴史」（一九七九年）を編集された。その後、ご自身で代表作だとされた「女性司祭の伝統」（『日本民俗学大系　神と仏』所収、一九八三年）を発

表され、この論稿を中心にして学位請求論文の『古代民俗信仰の研究』をまとめ、一九八三（昭和五十八）年六月に関西大学から博士号を授与された。その後も祭りの組織や儀礼に関する論稿をまとめた『民俗信仰の伝統』（一九八五年）、古代の親族組織の論稿などをまとめた『日本古代の親族と祭祀』（一九八八年）を発表された。

このころからは、古代の天皇の娘で伊勢に派遣された斎王（いつきのみこ）と、琉球王の妹や娘などがつとめた聞得大君（きこえおおぎみ）についての論文を次々発表された。聞得大君への関心は、斎王の論考の延長上にあるのだろうと考えていたが、それだけではなかったようである。

このたび、先生の書架の整理作業で卒業論文と修士論文が見つかった。卒業論文は、昭和弐拾九年度人類学卒業論文と記され、『琉球おもろの神霊観念について』と題された四〇〇字詰め原稿用紙に一九六枚の長編で、琉球の歴史のほか、農耕儀礼や御嶽などの聖地、ヲナリ神などの信仰が取り上げられていた。まだパスポートの必要な時代に沖縄に渡ったという話はうかがっていたが、これを書くためには何ヵ月か滞在して調査されたのだと思われる。

一方の修士論文は、『斎宮について』と題され、二〇〇字詰め原稿用紙二五二枚に斎宮の成立や斎宮と土着の勢力、祭祀田の形成の問題が取り上げられている。琉球も斎宮も、先生にとっては学生時代から三〇年以上も温めておられた特別な研究テーマであったと推察される。

先生は生涯九〇本をこえる論稿を発表されているが、その大部分は関西大学をご退職になってからまとめた『上井久義著作集』全七巻（清文堂出版、二〇〇五～七年）に収められた。各巻の内容を簡単にまとめると、

第一巻「民俗宗教の基調」は、古代の司祭者や神社祭祀、伊勢神宮と斎宮に関する論稿を収録しており、第二巻「宮座儀礼と司祭者」は、近畿地方と周辺部の若狭・伊賀地域の頭屋儀礼をフィールドワークと文書資料を用いて分析された論稿を収めている。

第三巻「女性司祭と祭儀」は、先生の中心的な研究テーマである女性司祭に関する論稿が集めてあり、神の嫁として神饌を運ぶ存在ととらえた人身御供の問題から各地の神社の祭りに登場する巫女の問題を取り上げている。第四巻「民俗社会の構成と葬墓」では、村落の社会構成の問題や葬送墓制に関する論稿を集めている。

第五巻「農耕・物忌・祖先祭」は、祖先をまつる祭祀や稲作・畑作の儀礼などの論稿を集め、とくに物忌は祭りの前段階ではなく、この行為が祭りの中心儀礼だと主張している。第六巻「琉球の宗教と古代の親族」は、琉球の聞得大君や先島の祭祀と、秦氏や賀茂氏など古代の親族関係の問題を取り上げている。第七巻「民俗学への誘い」は、エッセイなど短い文章を集めたもので、のちに論文に発展したものや論文にならないまでもヒントを記したものなど、上井先生の研究のエッセンスが詰まっている。こうして、各巻の題名を並べてみると、あらためて広い視野に立った研究をされていたことがわかる。

二〇〇一年から十年間、新庄町歴史民俗資料館（のち葛城市博物館）の館長に就任されたが、著作集以降は古代の葛城氏に関する論稿を発表された。二年ほど前に先生のお宅を訪ねた際にも、『日本書紀』を持ち出して何か原稿用紙に書き物をされていたが、書架から「名前に見る親族の構成」として古代の親族名称に関する遺稿が見つかっている。

また、『祭りの諸形態と民俗資料としてのマツリ』という、新著の構想メモも見つかった。第一部で祭りの場、祭祀組織、祭りの形態と機能という総論をまとめ、第二部で女性の司祭者や司祭者の引継ぎ、他界との分断、競技の様式化といった具体例をあげて祭りを論じようとされていた。各章の項目にあげられた調査地の写真フィルムも残っており、喜寿のころに研究生活のまとめとして新著を書こうとされていたことに驚くとともに、この書が実現されなかったことが誠に残念である。

筆者が上井先生の教えを受けるようになったのは、一九八一年の三年生の演習ゼミからである。翌年は一年間の国内研究員に入られたが、四年生の終わりのころに「女性司祭の伝統」のゲラ刷りを読ませていただいて、参考文献リストをまとめた記憶がある。その後院生になってからは、紀伊半島の調査や国東半島の調査に連れて行っていただいた。

写真撮影がお好きで、筆者が調査の報告で撮影してきた写真をお見せすると、撮影のタイミングや構図について詳しく批評していただいた。ご自身も三十五ミリフィルムのニコンFを長く使っておられたが、そのころはゼンザブロニカGS-1という六×七判カメラを購入され、約一・八キロの重いカメラを担いで撮影されていた。残された写真フィルムには、今はなくなってしまった祭りや民俗行事が記録されており、現在整理作業を進めている。

大学院を修了してからは、研究会以外で先生と話をする機会は少なくなったが、関西大学をご退職後、引き続いて五年間非常勤講師として大学院の授業を担当していただいた。毎週授業の一時間ほど前においでになるのを講師控室にうかがって、さまざまな研究の話をさせていただいた。この間に著作集の編集作業をすることになり、各論稿の引用史料や文献の確認作業を行った。あらためて先生の仕事を勉強し直すことになり、院生のころ以来の充実した時間を過ごさせていただいた。ただ残念だったのは、やや足が不自由になられたため、沖縄への民俗調査にご一緒して現地で昔のお話をうかがうことは叶わなかった。

会話の中で、研究については辛辣な批評をされることもあったが、普段はベレー帽をかぶって穏やかに話をされる先生でした。もうその機会がなくなってしまったことがとても寂しく思います。先生の生前のご指導とご厚情に心から感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈りします。

（関西大学文学部教授）